

梅の花の巻

今年作ったスマホ写真カレンダー「月々の花」の2月のページに登場するのが梅の花です。バラ科サクラ属に属しているだけあって、一輪一輪の花形も美しく一輪挿しにしても十分観賞に堪えるのですが、このように早春の寒空の中に咲き競う姿からは、私たちに春の到来を告げる心のこもったメッセージが伝わってくるような気がしますね。また、梅はそのむかし、菅原道真が「東風(こち)吹かば にほひおこせよ 梅の花 あるじなしとて 春な忘れそ」と歌に詠んでいますが、まさに梅は香りの花。梅の花から漂ってくるかぐわしくて奥ゆかしい香りを楽しみながら静かに花を愛でることができるのは桜の花見にはない趣きのあるところですね。



「松竹梅」などという日本人好みのする言葉がありますので、てっきり梅の原産地は日本だと思っていたのですが実は中国が原産地だったのですね。「松竹梅」は、中国の「歳寒三友」が元になっているそうです。松と竹は冬期に緑を保ち、梅は花を咲かせることから、こう呼ばれるようになったのだとか。但し、「歳寒三友」には日本の「松竹梅」のように、めでたいものの象徴といった意味は含まれていないのだとも。日本では、ほかのどの植物より早く花を咲かせ春の喜びを知らせてくれることから、“おめでたい花”とされていたのです。梅が日本に伝来したのは、3世紀の終わり頃または6世紀中庸という説がありますが、中国から日本に伝来した梅は、珍しさもあり多くの人たちに愛されたのでしょう、日本最古の歌集「万葉集」にも、梅を題材とした和歌が載っているようです。

梅の花には、歴代の日本人によって熱心な品種改良の手が加えられたのでしょね、現在では500種以上の品種が存在しているそうです。花の色も白の他にもピンクや赤などさまざまです。一重咲きのものや八重咲のもの、また枝が垂れる枝垂れタイプの梅や、鉢植えにして小さく仕立て室内での観賞に供される品種もあります。花の見頃も品種によりさまざまで、早咲き、遅咲きタイプのものがあります。また、梅には、花の美しさを鑑賞するための「花梅」の品種と、果実を収穫するための「実梅」の品種がありますが、花言葉となるとさすがに“梅干し”の元

の「実梅」は無縁で、「花梅」に対して次のようにつけられています。

＜梅の花全体の花言葉＞

先ずは「高貴」、「高潔」という花言葉があります。それぞれ、梅の花のまさに気品高い美しさ(高貴さ)と、気高く清らかな様(高潔さ)を示して、何とも言えず凛として咲き香る梅の花の雰囲気と言い表して妙なる花言葉だと思います。その他に「忠実」という花言葉があります。冒頭に掲げた菅原道真の歌とかかわりがあるようですが私には、その昔、水口幸治、中澤秀夫、山本哲照の 3 兄(いずれも 7 組) とともに北米大陸を 3 週間で 9,000km 走ったロングドライブの過程で立ち寄ったイエローストーン公園の間欠泉(ガイザー)につけられたニックネーム「オールド・フェイスフル」(Old Faithful)の、時間に忠実な(Faithful)噴出の仕方の方がよほどかぶっているように思えます。別の花言葉の「不屈の精神」「忍耐」の通りに、冬の寒さを耐え忍んで、今年も期待に背かず「忠実に」花を咲かせてくれているではありませんか。

＜花色によって違う花言葉＞

- ・白色の梅の花言葉は「気品」と「澄んだ心」。白梅の清楚な雰囲気には、見るものをはっとさせるような澄んだ魅力がありますね。そして見頃を迎えても決して華やかすぎず奥ゆかしい花模様です。その清楚な美しさを見事に表現した花言葉だと思います。
- ・赤色の梅の花言葉は「優美」。そもそも先に日本に伝来したのは「白梅」一種でしたから、わざわざ「白梅」といわず、「梅」で済ませていたのですが、その後 9 世紀前後に「紅梅」が入ってきたために、両者を区別する必要が生じ、初めて「紅梅」「白梅」と称されるようになったのだそうです。そして、紅梅の木の断面はピンクのような淡い紅色、白梅の木の断面は白っぽい色をしていて、しかも「白い花の咲く紅梅」や「赤い花の咲く白梅」というものもあり得るのだそうですから、ここは「紅梅」ではなくて「赤色の梅」の花言葉となるわけです。そして、白色の梅がその白さを雪になぞられたり凛冽な薫りを讃えられたりしたのに対して、赤色の梅の見頃を迎える満開の風景は、艶やかな女性のような色香、上品な美しさを示すところから「優美」という花言葉がつけられたわけですね。
- ・ピンク色の梅には、その可愛らしさがまるで少女のようなピュアな輝きを放っているように見えるところから、そうした雰囲気をあらわした「清らかさ」という花言葉が付けられています。しかし、湯河原の幕山の山麓にある梅林では、白、赤を交えたピンク色主体の梅の木が約 4000 本もあり、これが咲き誇って下の写真のように華麗な絨毯を織りなすのですから、「清らかさ」も並大抵のものではありません。



即興俳人の高幡大馬王殿には大変遅いタイミングで「梅の花で一句」とお願いしたのですが、早速、過去の作品に新作句を交えて送ってくれました。既作句は以下の3句。高幡大馬王殿にとっても前述した湯河原の幕山山麓の梅林の印象が強いようです。()内の添付コメントともどもご覧になってください。

梅園を 抜けて幕岩 ヤッケ咲く 高幡大馬王

(幕山の幕岩は、ロッククライミングの練習場所のメッカだそうです。)

白梅の 赤色混じる 謎めいて 高幡大馬王

(なぜか、一本の同じ木で赤白混じっているのもありました。それもきれいでした。)

春霞 古墳のごとし 真鶴は 高幡大馬王

(昼食休憩した幕山山頂から 真鶴半島が前方後円墳のように見えました。)

そして、「せっかくなので、新しいのも作ってみました」として、ツアーガイドとして何度も足を運んでいる京都の北野天満宮での梅見の記憶などをたどりながら作った以下の新作2句を送ってくれました。

悲しげな 撫で牛の瞳(め)や 紅き梅 高幡大馬王

(京都 北野天満宮には、菅原道真公を徹夜で待って瞳が赤い撫で牛がいます。)

つややかな 撫で牛の鼻 梅香る 高幡大馬王

(道真公の悲運の物語を思い出して撫でられているのかこの天神様の撫で牛の鼻もつやつやです。)

右図のような梅の花をデザインした市章をもち、小田原提灯、蒲鉾と並んで梅を名産品として掲げてきた小田原市で生まれ育った私は幼少の頃から梅と親しんで暮らしていました。また、長じては、白梅を中心に約35,000本が栽培されている小田原の曾我梅林が、茨城県水戸市の偕楽園、埼玉県越生町の越生梅林とともに関東三大梅林にあげられているということも学びました。ですから、こんな小田原市を擁する神奈川県が日本一の梅生産量1位だと思っていたのですが、「都道府県別の梅の生産量ランキング」を見ると、和歌山県、群馬県、福井県、青森県に次いで第5位、しかも、トップの和歌山県が国内総収穫量の6割以上を占める寡占状態が続いているということが分かって少々驚きました。



梅のトップブランドとして和歌山県産の「南高梅」の名が知れ渡ってきましたが、このブランド名の発祥は今を去る70年余も前の1950年だということですから和歌山県の関係者各位の取り組みが如何に腰の据わったものであったか分かるような気がします。1950年、上南部村で優良品種へ栽培を統一するための「梅優良母樹種選定会」が発足し、5年にわたる調査の結果、37種の候補から「高田梅」を最優良品種と認定したのだとのこと。そして、調査に尽力したのが南部高校の教諭竹中勝太郎氏(調査委員長、後南部川村教育長)であったことから、高田の「高」と「南高」をとって「南高梅」と名付けられ種苗名称登録されたのだそうです。神奈川県だったら「小田高梅」となっていたのかななどと思うと愉快ですね。



「南高梅」は果実が非常に大きく、種は果実のわりに小さめで、また、果皮にほんのり赤みがさし、果肉のやわらかいのが特徴で、主に梅干しや梅酒に加工されているのだそうです。典型的な果実を収穫するための「実梅」の品種だと思ったのですが、右上の写真のように花の美しさを鑑賞するための「花梅」としての気品を備えています。梅林についても然りで、曾我梅林なども食用の「実梅」の産地ですが開花の時期は圧倒的な「花梅」の美観と芳香が漂う見事な観梅の名所となります。「梅」の語を用いた「塩梅(あんばい)」は、もともと塩と梅酢を指すのだそうです。酸味と塩味は料理の基本であり、そのバランスが大切であることから、“とても具合のよい”、“ちょうどよい”ことを意味する「いい塩梅」という慣用的な表現が生まれてきているのですね。これも「実梅」が日本人の食生活に深く入り込んでいる証拠で、実は、「花梅」と「実梅」は品種を分かつ言葉ではなくて、多くの場合は、観賞用として人の目を楽しませていた「花梅」が後に「実梅」に転じて、人の舌と喉を楽しませてくれているのではないかと思います。

その他、“とりあわせの良いこと”を示す「梅に鶯」という言葉と並んで、“美しい物が並んでいること”を表す「梅と桜」という慣用的な表現がある反面で、「桜伐(き)る馬鹿、梅伐らぬ馬鹿」という、桜と梅のふたつを対比しつつ栽培上の注意を示した表現がありますね。桜はむやみに伐ると切り口から腐敗しがちであり、剪定には注意が必要なのですが、梅の樹は剪定に強く、むしろかなり切り詰めないと徒枝が伸びて樹形が雑然として台無しになって実の付き方も悪くなってしまうのだそうです。一方、種を植えてから実を収穫できるまでの期間を指す「桃栗三年、柿八年、柚(ゆず)の馬鹿野郎十八年、梅はすいすい十六年」という言葉にも梅は登場していることを知りました。梅も実を実らせるようになるために長い年月を要しているのですね。なお、「梅田」という地名が各地にあるようですが、これは「梅」とは直接関係なくて、音が「埋め」と同じであるために田を埋めた場所である埋め田を「梅田」という漢字に変えただけのことなのだそうです。どうやら「花木の人気は、その花木の名前がどれほど慣用表現の中に含まれているかによって測られる」と言えそうですね。